

### 中央大學研究會第四回例会

七月一日(金曜)午後三時より本學々員俱樂部に於て研究會第四回を開く。第二分科會第二回の研究會にして、本學教授杉本榮一氏の『經濟生活の動態的考察』なる題下に研究報告ありたり。報告終りて幾多の質問あり晚餐後も引續き質問論議ありて十分成功の裡に九時散會せり。研究報告の概要次の如し。

理論經濟學は一個の經驗科學である。斯學は、之が對象たる資本制經濟社會の個性をば、最も如實の相に於て説明し得るものでなければならぬ。報告者はこの見地よりして、資本制經濟社會の個性を最もよく表現する現象たる景氣交代の事實を思ひ浮べ、之に對する舊來の經濟理論の説明の妥當性を檢する。そして「他の事情にして等しき限り」なる前提の無批判的使用を事とす

る舊來の經濟理論が、動的發展の状態に於ける經濟社會の把握に、甚しき無能力を暴露した、と斷ずる。

經濟生活の動的發展の過程に於ては、不變なりと假定せられたる他の事情中甚だ決定的なる要素の一個又は數個が、可變と假定せられたる要素の必然的結果として、夫れ自體變動する。従つて之が研究に際して、我々は恣ひまゝに一定の假定を設け、此の假定的條件を固定せしめ、以て一定の假定的經濟社會を形作り、その内部に於ける各種要素の相互關係を研究すると云ふ如き單なる抽象的方法に固執するを許されぬ。資本制經濟社會の基調を決定する諸々の要素は、私利利潤獲得を目的として行動する經濟單位の活動の社會的綜合として、或は因となり或は果となりつゝ、複雑極まる變化をなす。之等の本質的なる要素は、假令その數が如何に多くあらうとも、之を無視して理論の構成を行つてはならない。我々は、その各々を自由に變化せしめその完全なる綜合的影響の下に於てのみ、或る事象例へば供給の變化と價格の變化との關係を尋ねなければならぬ。

茲に於て報告者は近時の景氣交代論に多くの價値を認め、統計的・分析的なる亞米利加流の研究と理論的・綜

合的なる獨乙流の研究との綜合を思ふ。我々は先づ第一に、出來得る限り經濟統計學の助けを借りて經濟的與件に加工を施し、最も具體的なる素材より出發してその中から當面の研究對象たる一定要素Aの可能的に最も純粹なる變化の軌跡を發見し、之をば同様の操作を施されたる他の要素Bの變化の軌跡と比較し、然る上で第二に之を推理の材料として、A、B相互間に果して一定の因果關係ありや否やを研究し、進んではA要素の一定時に於ける具體的狀態 $a_1$ からしてB要素のそれに對應する一定時に於ける具體的狀態 $b_1$ が如何にして發生し、又 $b_1$ が原因となつて $a_2$ が如何にして發生したるかを確定し、以て $a_1, a_2, a_3, \dots$ の系列と $b_1, b_2, b_3, \dots$ の系列との相互關係を動的發展の狀態に於て説明しなければならぬ。

斯くの如き考察方法に依つて、我々は徐々に經濟生活發展の理論の建設に向ふことが出来るであらう。

因に當日の參會者は講演者を初め、川原、和田、黒澤、長崎、吉田、柴田、高木、三輪、天野、松浦、八木澤、生出、丹後、三浦の諸教授なりき(研究會幹事記)